

各駅停車・大分県歴史散歩

# ふるさと駅の駅

(24) バス路線 野津市、田中、長湯、久住

初版：2007年8月10日

(11) バス路線 (35) 野津市・風連鍾乳洞

## キリシタンと吉四六



●この電子ブック「ふるさとの駅」=各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に掲載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながら読みいただきお楽しみください。

◀ 寺小路にあるキリシタンの磨崖千十字

## ■野津院衆の興隆

野津町は、その名が示しているように大きな野の中にある津（港）のような存在とはいええないだろうか。鉄道こそ通っていないが、国道10号線を主軸に地方道を交差させ、三重、犬飼、白杵、弥生・佐伯に通じ、大野川流域と豊後水道沿岸を結ぶ交通の要地である。このため古代には倉院が置かれて野津院と称され、さらに江戸期には市場も発達して野津市と呼ばれている。『弘安図田帳』には「国領野津院六十町、地頭職野津五郎頼宗」と見え、倉院が置かれていただけに中世に入っても国領としての支配が強かったらしい。

頼宗は大友氏二代親秀の五男。蒙古襲来のさいの戦功で野津院のうち60町の地頭職を得たらしい。彼を祖として野津氏は一帯に勢力を広げて土着し、やがて波津久氏はじめ地名を姓とする十余氏の諸家をわけて「野津院衆」と呼ばれるようになった。

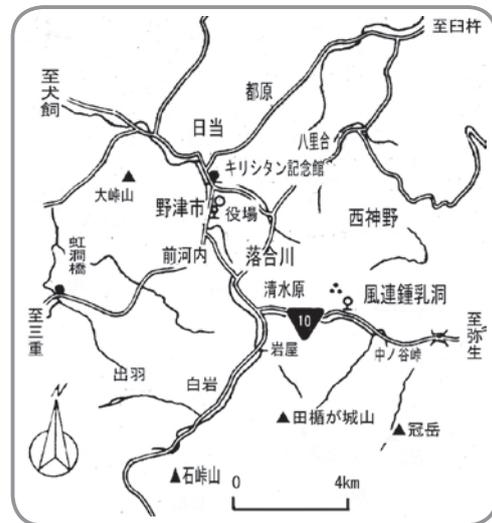
## ■レアンとマリヤ

中世で特筆されることは、ここが豊後キリシタンの聖地ともいえる存在だったこと。天正6(1578)

年に大友宗麟が日向に兵を出したさい、野津は後詰めだった大友義統の駐留地となる。このさい彼は姉妹や家臣にここでの受洗をすすめた。

宣教師らの報告によると、当時この領主レアンと妻マリヤは「日本にある最良のキリシタン」で、一族や家臣ら200余人が洗礼を受けた。レアンは自費で教会を建て、慈善事業を行ったが、一方では五カ所の社寺を焼き、仏像の首を斬(き)って川に流した。天正8年には宣教師のための住居を建て、信者は3500人、さらに天正10年には5000人に達し、宣教師が出向いてミサや説教をした。

そのころ豊後では宗麟のおひざもとである白杵や府内が布教の中心地だったが、両地を除いて会堂があったのは朽網(直入町)と野津だけである。



<メモ> 周囲にある名所旧跡等

- ◇野津市まで大分市中心街から17.5キロ、犬飼町久原から7キロ、
- ◇白杵市から障子岩、日当経由で17.5キロ。風連鍾乳洞入り口まで大分から25キロ、
- ◇白杵から八里合(備後尾)水地、落合経由で21.5キロ。柳井瀬まで野津市から8.5キロ、三重町駅から6.5キロ。

いまに遺跡は多く残る。寺小路にある磨崖クルスははじめ、各地にキリシタン墓があり、キリシタン記念館には墓石類はじめ遺物、関係文書など150点が展示されている。都原に「汚れなき聖母の騎士修道女会」のベトナム難民宿舎「なぐさめの聖母の家」が建てられたのも、そのゆかりだろうか。

### ■奇行と奇略の人

江戸時代になると、野津町域は三重町とともに臼杵領となり、同藩では野津を七組にわけて庄屋を置いた。各庄屋は中心となる野津市に設けられた庄屋会所に集まって、いろいろな民政上の問題を協議したという。野津市の名は、毎年10月3日に蛭子社の市が開かれたことによるそうだが、やがて定期市は毎月四と九の日、のち一と六の日の六斎市となっている。

同時代の野津を代表する人物といえば、大分県人ならだれでも知っている吉四六さん。広田吉右衛門といい、寛永5（1628）年に野津市に生まれ、名字帯刀を許された豪農で、88歳で没したというが、この人が本当に吉四六であったかどうかはわからない。墓は野津頼宗が創建したとされる普現寺の参道近くにある。

この寺の和尚さんと庄屋さんは「吉四六話」にししばしば登場する。ともあれ奇言奇行で村人をけむに巻く一方、奇才奇略でその難儀を救う話は広く人々に愛され今日にいたる。演劇に映画に取り上げられ、県民オペラになって外国公演までする昨今だ。

### ■鍾乳洞と虹澗橋

観光名所としては風連鍾乳洞。大正15（1926）年2月に発見された。洞の長さは500メートル。きれいな洞として広く知られている。国の天然記念物。ここから山ひとつ越した西神野の神野洞窟は旧石器時代人の住居跡で、昭和57（1982）年の発掘調査で炉の跡が見つかった。この一帯もまた、本匠村などと同様に、多くのナゾをかかえた石灰岩地帯だ。

町内の文化財としては弘安8（1285）年の備後尾の一石五輪塔、文永4（1267）年の水地の石造九重塔などが国の重文。

三重町との境になる柳井瀬には文政7（1824）年の石造アーチ橋がかかり、虹澗（こうかん）橋と呼ばれる。荻町の岩戸橋などとともに、大分の代表的な江戸期の橋で、まさに澗（谷）にかかる虹である。 

⑪⑫ バス路線 (36) 新殿

奇祭・ひょうたん祭り



◀ 珍しい平尾社の八角鳥居

## ■ややこしい境界線

町や村の境界線は、山の尾根筋や川の流れによって決められていることが多い。

だが、千歳村の場合、そのような常識は通用しないように思える。三重町との境が大野川である点は「順当」だが、犬飼町や大野町との境界線はなんとも複雑。尾根を輪切りにするかと思えば、谷間の平地を斜断して境が通るといふ具合で、地形は無視されることが多い。

このことは古来、土地所有が複雑だった証拠ではないだろうか。千歳村一带は古代の大野郡四郷の一つである田口郷に当たるらしいが、地の三郷の名が大野、緒方、三重などと現代にはっきり残っているのに比べ、田口の名は村内の大字船田のなかにあるかつての田口村らしいとしかわからない。

そしていつの間にか井田郷と名を変える。中世になっても最初は国領だったらしいが、鎌倉末には北条一門の所領になる。建武元(1334)年には島津氏が後醍醐天皇によって地頭職につけられたものの、戸次氏との間でごたごたがあり、手にしたのは20年近い後のこと。だが、次は阿蘇氏との間に間

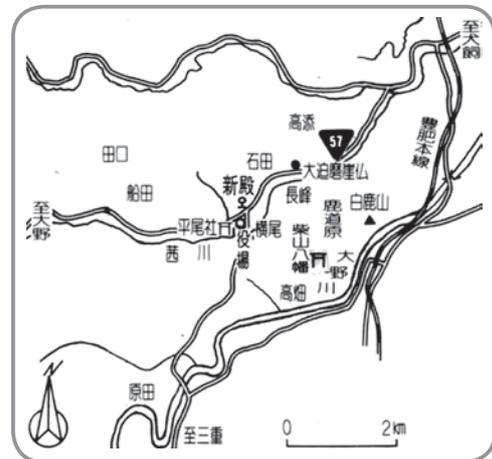
題が起こり、乱暴を受ける。そしていつの間にか大友氏の支配地に入ってしまうという状態。

## ■大野のなかの海部

さらに面白いことは、村の南部にある柴山あたりは、大野郡にありながら中世末まで海部郡に組み込まれていたこと。『弘安凶田張』では海部郡の項に「国領柴山村十町」とある。遠く離れた海部郡の飛び地がなんでここにあるのかわからない。おそらく在地領主の関係だったろう。

ここにある柴山八幡は宇佐宮の分霊をまつたものだが、その宝徳2(1450)年の棟札に「大日本豊後州天部郡内柴山八幡宮」とある。この天部が海部であるのはいうまでもない。

柴山八幡は、奇祭ひょうたん祭りで有名。毎年



<メモ> 周囲にある名所旧跡等

- ◇新殿まで大分市中心街から17キロ、犬飼から6キロ、三重町駅から8.5キロ。柴山八幡は三重町～新殿の途中にある高畑から車道を2キロ、
- ◇また菅尾駅から菅尾石仏経由(バス便なし)で3キロ。平尾社八角鳥居は新殿から横尾経由で1キロ、大迫磨崖仏は新殿から大分寄りに1キロ。

12月第一日曜日の霜月祭りである。神幸の行列は騎馬武者一人、馬方二人、槍二人、両掛二人と神輿(みこし)だが、その先導をするのがひょうたん様。

真っ赤な衣をつけ、頭には大きなひょうたん、腰にも神酒の入ったひょうたんをさげ、1メートルもある大きなわらじをはいて、ゆうゆうと歩く。この役につく人には幸運がもたらされるという。また、その神酒をいただくで無病息災。このため沿道には観光客を含めてたくさんの人が順番待ちをする。

### ■数多い石造文化財

柴山近くの白鹿山には風雅な山門を持つ妙覚寺がある。柴山、白鹿山から柴山河原、さらに大野川を渡って三重町菅尾石仏あたりは大野川中流の代表的景観で、河岸段丘が幾重にも積まれている。

村内の文化財は石造品が多い。珍しいのは平尾社の八角鳥居。社は新殿の近くにあるが、鳥居は1キロほど離れた鳥居原にある。大きな杉の下に、二段継ぎの八角形面取りの柱をもって建てられ、観応2(1351)年から文化7(1810)年まで5回にわたる修築の記録が刻まれている。

大迫磨崖仏(井田石仏)は高さ3.2メートルの大日如来坐像。岩に彫られているが、顔面や両手首、納衣などが粘土でつくられているのは石仏の多い県下でも珍しい。このほか平尾社に暦応3(1340)年の宝塔、新殿に貞和3(1347)年と延文5(1360)年の五輪塔、柴山に天文2(1533)年の石幢。さらに原田には慶長8(1603)年の庚申塔がある。ひょうたん祭りや、これら石造品は県文化財に指定されている。

### ■今でも盛んな養蚕

産業では養蚕が知られている。明治26(1893)年に新殿に大野製糸工場ができて以来、千歳村だけでなく近郷の火山灰台地でできる桑を生かして養蚕が大きく発展した。工場は昭和17(1942)年、戦争が激しくなるとともに八代(熊本県)の軍需工場に統合移転させられたが、戦後も今日まで、養蚕は合理的な新飼育法に変わって健在である。

戦争といえば、鹿道原に滑走路2000メートルの飛行場が造成された話は三重町駅のさいにふれた。いまは畑に戻り、立派な桑などが育っている。 

⑪⑬ バス路線 (37) 田中

大友氏の「ゆりかご」の地



◀ 大友能直の墓

## ■ 60カ所の先史遺跡

大野郡、あるいは大野川。その大野の名を背負うこの町は、いかにも大いなる町にふさわしいところ。大野川は町の南端を流れるだけだが、神角寺・鎧ヶ岳から四辻峠を経て雲ヶ背岳、御座ヶ岳に連なる北端の山なみを水源として、酒井寺川、田代川、茜川、柴北川など大野川支流が南流、広大な大野原などの台地をつくりあげる。南下がりの台地は、太古の人たちにとって住みやすい場所だっただろう。大野川流域にあって、大野原は竹田市菅生や萩町とともに先史遺跡の多いところである。

最近の圃(ほ)場整備や畑地開発の事業にともなって、新たに発見される遺跡もかなりあり、遺跡総数は現在までに60カ所を超している。縄文時代は夏足原、駒方など23カ所、弥生時代では多数の住居跡とともに後漢鏡の破片が出土した二本木、松ノ木などの遺跡が代表格。古墳時代では前方後円墳の坊ノ原古墳(県史跡)が古式墳として知られ、近くに円墳の御塚もある。

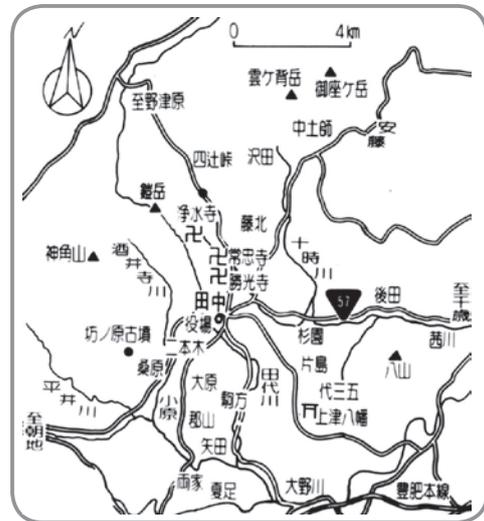
## ■ 大友氏の入国

古代は豊後大神氏の根拠地の一つで、大野氏に

よって支配された。大野氏は平安時代に鎮座した上津八幡の大宮司でもあり、いまの宮司はその子孫という。大友氏が豊後国守護として入国したさい、大野氏をひきいた泰基が神角寺で抵抗したことはすでに述べたが、その相手が豊後大友の初代である能直とする『大友興廢記』などの記述はちょっとおかしいという。

泰基の抵抗当時、鎮西奉行だったのは中原親能であり、大友能直はその養子として、のちに大野荘地頭職はじめ豊後国を譲られたというのが現在の定説となっている。とすると、泰基と戦ったのは鎮西平定に乗り出していた中原氏だということになる。

また、大友能直その人も、豊後守護職についたからといって、豊後に下向してきたわけではない。大



<メモ> 周囲にある名所旧跡等

◇ 田中まで大分市中心街から27キロ、犬飼から16.5キロ、三重から16キロ、緒方から11.5キロ、◇ 朝地から9.5キロ、竹田から16キロ。田中から車道で勝光寺1.5キロ、常忠寺2キロ、神角寺7キロ、浄水寺4キロ、上津5.5キロ。住吉から落水磨崖仏0.5キロ、坊ノ原古墳1キロ。

友一族は新しい領地を得て次々と入国、土着しただろうが、大友惣家が豊後に入ったのは三代頼泰のときとされる。

### ■能直と深妙の墓堂

ところが、大野町には常忠寺に大友能直の墓といわれるものがある。これはどうしたことだろうか。実は、能直は親能にもらった大野荘地頭職を貞応2(1223)年に妻の深妙に譲っており、彼女は17年後の延応2(1240)年、ここを男女あわせて七人の子供たちに分け与えたのである。

それをきっかけに、大野荘に大友一族の土着がまったわけ。その子供の一人で、現在の大野町の一部をもらった人に九郎入道能基がいる。深妙は大野を譲られたさい、そこに逆修のため自分の墓堂(泊寺)を建てるとともに、隣接の勝光寺に能直の墓堂もつくり、能基にそれらの供養を命じたらしい。常忠寺の五輪塔が能直の墓かどうかはわからないが、大野町のこの一帯に墓堂があったことは確実とみられる。

つまり深妙は、子供たちが最初に土着定住したこの地を重視、一族の精神的中心とする意を込めて墓堂

を設け、子供の一人を僧として守らせたわけ。いわば、大野は大友氏の「ゆりかご」の地ともいえそうである。

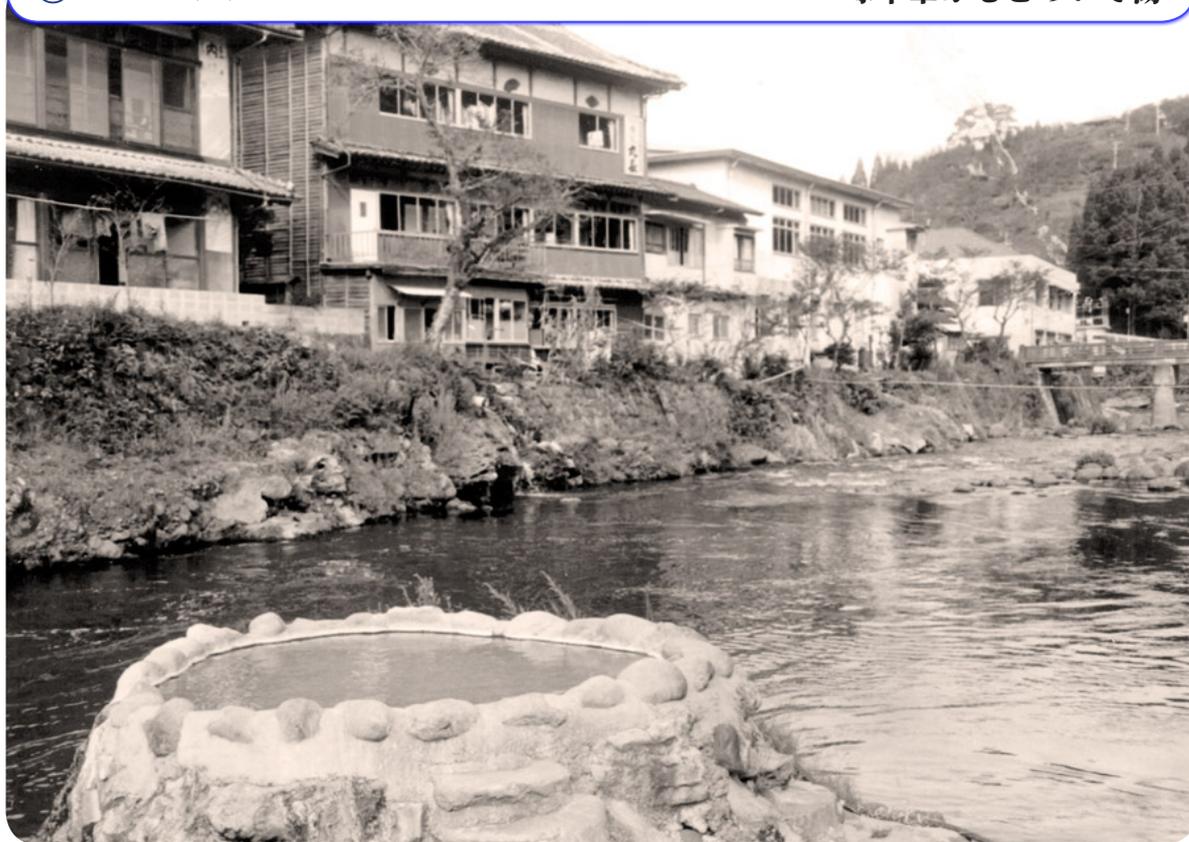
### ■烏帽子岳ポタン桜

勝光寺は樹木に囲まれた池をもつ古寺で、一般に「木原の不動様」で知られる。ここから常忠寺などを訪ねたら、少し遠いが神角寺や浄水寺に足を伸ばすといい。神角寺は朝地駅で紹介した。浄水寺は烏帽子岳の中腹にあり、4月下旬のポタン桜は見物客が多い。健脚の人なら両寺を結び、古城跡の鎧ヶ岳ハイキングも。

鎧ヶ岳城は大友氏のもとで戸次氏が居城としていたもの。ここから宗麟の時代に活躍、筑前方面の守りを立花城で固めた戸次道雪が出る。常忠寺で能直の墓と並んで建つ五輪塔は、ここの城主だった戸次統常の墓である。このほか、町内には県文化財として長畑に長寿庵五輪塔二基はじめ、河面に表五輪塔二基、福土宝篋院塔三基、夏足に三徳石幢、上津社に鳥居や鰐口、田代の犬山神楽などがある。また、住吉に落水磨崖仏があり、不動明王が彫られている。明和2(1765)年の造立である。

①④ バス路線 (38) 長湯

球覃峯ふもとのいで湯



◀ 長湯温泉のカニ湯

## ■神河と二つの湯河

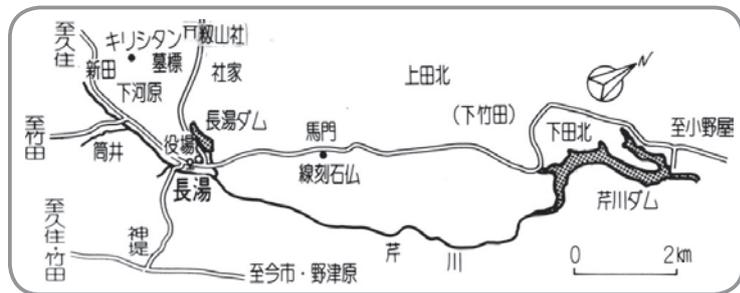
直入町は、一般に大野・直入地区と称される大野川流域市町村のなかにおいて、大分川水系に属する町である。九重山群の東部を源流とするいくつかの川が芹川となり、流域にたくさんの集落を立地されて大分川に注いでいる。

『豊後国風土記』では、この芹川が大分川の本流と考えられており、大分川の項に「この川の源は直入郡朽網の峯に出て東に流れ下り…」とある。朽網の峯というのは九重山群のことで、球覃峯とも書かれ、同じ風土記の同峯には「この峯の頂に火つねにもえたり。もとにいくつかの川あり、神河という。また二つの湯河あり、流れて神河と会う」と記述される。

神河は江戸時代に寒川と呼ばれ、いま芹川。二つの湯河は七里田川（久住町）と筒井川であろうといわれ、湯河の名が示すように出湯（いでゆ）があった。これが長湯や七里田の温泉である。また、その当時、九重山群が煙をあげていたことも、この記載からわかる。

## ■直入物部神の地

朽網、球覃は「日本書紀」の来田見であり、さら



に救民と書かれたこともあった。直入町から久住町、また、いま庄内町に入っている阿蘇野地区が古代の朽網郷。地名の起源に景行天皇にからむ話があるが、禰疑野で土蜘蛛と激しい戦をする前、天皇軍が大分から進軍してきたのがこの地とされる。

『日本書紀』では戦いにあたり、天皇は志我神、直入物部神、直入中臣神の三神に戦勝を祈願する。志我神は朝地町、中臣神は庄内町阿蘇野に鎮座する神であろうということはすでに述べたが、物部神は直入町の社家にある笏山神社とされている。

物部神をまつるとすれば、このあたりに中央の物部氏とつながりのある人たちが住んでいたのだろう。この社家の谷を見おろす久保や塚原に前方後円墳や円墳が数基ある。あるいは、物部神をあがめていた一族の首長が眠っているのだろうか。

<メモ>

- 周囲にある名所旧跡等
- ◇ 小野屋駅から芹川ダム 9.5キロ（大分市中心街からは 22キロ加算。以下同）
- ◇ 馬門 19.5キロ、長湯 22キロ（長湯ダムまで車道 0.5キロ、笏山社まで同 3キロ、神堤までバス 3.5キロ）新田 24.5キロ（キリシタン墓まで車道 1キロ）。豊後竹田駅から長湯まで 17キロ。

ただ、史料に登場してくる当地の支配者は豊後大神氏にかかわる直入氏や朽網氏である。彼らは大友氏の入国とともに姿を消し、そのあとは神角寺で大野泰基と戦ったという古庄重吉に与えられ、ここに新しい朽網氏が登場してくる。また下竹田地域は大友氏二代親秀の七男親泰のものとなり、田北氏となって発展した。

### ■ INRI の墓碑

この郷にキリスト教が伝えられたのは天文 23 (1554) 年のこと。ルカスという信者がいて、朽網氏の保護のもとに自力で教会を建てるなどして、信者数は 300 人にのぼった。府内、臼杵、野津とともに、豊後における重要な布教地だった。

当時の遺跡として県史跡に指定された T 字のキリシタン墓碑が原にある。INRI (ユダヤ人の王、ナザレのイエス) の文字が刻まれており、最近はこちらが大十字架の罪標 (すてふだ) の部分ではないかとする考えも出された。近くには隠れキリシタン墓群の下河原墓地もある。一方、馬門には対照的に線刻の磨崖仏があって、同じく県史跡。丸彫りに近い磨

崖仏が多い県下では珍しいもので、蓮華 (れんげ) の舟から波間の月影をめぐる水月観音と、その隣に五輪塔を背景に比丘尼が刻まれている。

### ■ 課題は観光開発

長湯温泉は芹川の川べりに連なる静かな温泉場。江戸時代には岡藩の手で御湯屋が設けられ、藩主や藩士がたびたび湯治に訪れたといい、御前湯などの名も残る。薬師湯、長生湯、不老湯なども、古い湯治場らしい。面白いのは川岸に湧(わ)く露天風呂(ぶろ)のカニ湯。昔、殿様の隠し女が入浴している姿に僧と川のカニが横恋慕し、互いに争ったという伝説がある。ぶくぶくと吹き出す泡が、カニの吹く泡に似ているからだといわれる。南の方にある神堤は肥後街道の宿場の一つ。旅の疲れをいやしに来る人もいだろう。

芹川ダムは昭和 31 (1956) 年に完成した多目的ダムで、冬のワカサギ漁で知られており、温泉場近くには長湯ダムもある。九重山群と温泉とダム、文化財。それに農業を組み合わせた観光開発が町の大きな課題の一つである。

①①⑤ バス路線 (39) 久住・都野

明るい草原の輝き



◀ 久住高原に立つ白秋の歌碑

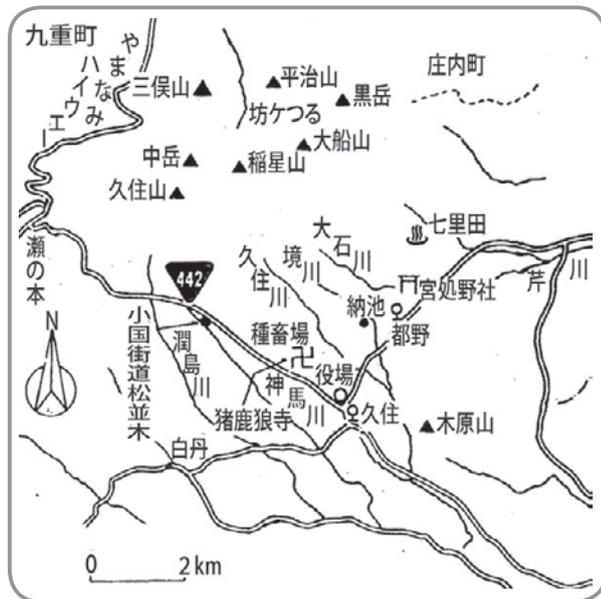
## ■数々の高原の歌

九重山群は「九州の屋根」であり、その南に広がる久住高原は北の飯田高原とともに九州の代表的な草原。とりわけ久住高原は南の陽光を浴びて、明るくおおらかである。山と高原を讃(たた)えるには、拙文を読んでいただくより、次の数々の歌を口ずさんでもらう方がてっとり早い。

- 草深野ここに仰げば国の秀(ほ)や  
久住は高し雲を生みみつ 北原白秋
  - 大いなる師に近づくと似たるかな  
久住の山に引かるる心 与謝野寛
  - 久住山阿蘇のさかいをする谷の  
外はひださえ無き裾野かな 与謝野晶子
  - 雲はあらず北九嶺に霧こめて  
久住の里は今は秋立ちぬ 筑紫久嶺
  - くすみ原初なく風のふくまに  
阿蘇の煙のうちなびく見ゆ 小杉未醒
  - 朝霧の藪の馬塞垣ひきはすし  
また鎖してゆく藪の馬塞垣 浅利良道
- とにかく、紹介していったら歌にきりはないが、古いところでは

<メモ>

周囲にある名所旧跡等  
◇久住まで豊後竹田駅から13キロ。  
◇久住から猪鹿狼寺前1キロ、南登山口5.5キロ、赤川8キロ、久住高原庄8.5キロ、瀬の本高原15キロ、境川2.5キロ(納池まで1.5キロ)都野6.5キロ(七里田まで1.5キロ)倉橋9キロ(宮処野社まで1.5キロ)。久住山登山は片道3~5時間。



- 朽網山夕いる雲の薄れゆかば  
吾は恋むな公(きみ)が目を欲り 万葉集卷十一

## ■宮処野の地

古来、多くの旅人が訪れ、高原に目を洗われる思いをし、また去って行った。『万葉集』には「藤井

連の任を遷されて京に上りしとき娘子の贈れる歌」もある。

● 明日よりは吾は恋むな名欲山

石踏み平し君が越え去なば 卷九

名欲山、つまり直入山は、竹田市と久住町の境にある木原山あたりと推定されている。この山を巻いてバスが久住に入ると、そこにあるのはゆうゆうたる草原の広がり輝き。

そこが朽網郷であったことは直入町のさいにふれた。都野は景行天皇が行宮を置いて軍議した宮処野の地と伝え、同名の神社があって天皇をまつ。秋祭りは著名な神保会（県文化財）である。新任の国司が神宝を奉獻する神宝会に由来するという。

明治末（1912年）ごろまでは、この祭りの市では日ごろ思いをかけている女性の肩に手ぬぐいをかけ、女性がそのままにしていれば承諾のしるしという「かたげ市」「てぬぐい市」だった。遠い昔の歌垣（唄歌会）の名残だろうか。

■ 肥後、小国の街道

旅人のなかには変わり種もいた。建久4（1193）

年、源頼朝は富士の巻狩りに先だって、梶原景高と仁田忠常に狩りの作法を学ばせるため、阿蘇大宮司のもとに派遣した。

二人はその帰途、予行演習を久住高原で行ったが、ここが殺生禁断の地だったため、のちに頼朝は久住山のふもとの慈尊院を猪鹿狼寺と改め供養した。寺はもと山の直下にあって久住山信仰の中心だったが、いまは山の遥拝所だった地に移されている。

江戸時代になると、都野地区は岡領、久住地区は肥後領となり、肥後藩はここに肥後街道の宿場を置いた。いまの久住の中心街がそれである。街道は熊本県から久住町白丹に入り、久住からは直入町南部を経て野津原に抜けた。藩主の本陣（御茶屋）は久住小学校のあたり。

とともに、ここには岡城下の竹田から小国を経て日田代官所に通ずる小国街道もあり、町のなかで交差した。

同街道の面影はいまも、久住高原のどまんかに松並木となって残り、国道442号線が併走する。沿道に猪鹿狼寺、白秋歌碑の雨降峠、赤川温泉などがあり、瀬の本で九州横断道路と合う。

## ■集う登山者

街道のため旅人はますます多くなったが、近代から現代にかけては、冒頭の文人たちを含めて、九重山群と高原の自然に親しむたくさんの人を迎えている。山群は飯田高原のさいに概観を紹介したが、もともとは久住高原側が登山にとっても表口的存在だった。

主な登山路としては、沢水経由の本山道と南登山

口からの道が久住山や中岳をめざし、鍋割坂からは坊ヶつる、また七里田温泉から大船山のコースもある。七里田から登る大船の中腹には「アルペン大名」といわれる岡藩主・中川入山の墓地がある。

なお、納池公園も忘れてはいけない。中世、白丹南山城主・志賀氏の有楽地に始まり、肥後藩主によって公園化された地で、森の中に庭園の趣がただよう県の名勝である。



---

## デジタルブック版

「ふるさとの駅 = 各駅停車・大分県歴史散歩 =」 (24)

2007年8月10日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画部内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN (なんなん)」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。